

私たち教育委員は、一年を通じて様々な行事で学校や保育園を訪れます。子どもさんたちには「よく知らないけどいつも学校に来るおばちゃん」と思われているかも知れません。私は『教育』を学んだ人間ではありませんので、基本は常に母親目線です。現役の保護者のときはわが子の様子ばかり気になり、ハラハラドキドキだったのですが、保護者を卒業し、大勢の子どもさんたちを客観的に見守る多くの機会をいただける今は、足取り軽く、わくわくして学校に向かいます。



## 子どもたちからの贈りもの

教育委員 関 眞知子

一年に数回の参観日は、早い時間に教室をまわらせていただくことが多く、普段の授業の様子や、イベントに向けての練習の場面を参観できます。ドアの開く音に敏感に反応し、私たちの姿を見てニコッとする子、机の上を覗かれることを意識して目をそらす子、授業に集中して気づかない子：飾らない自然な姿です。もちろん中学生ともなれば、授業の邪魔にならないよう、私たちはそうつと出入りし、ひっそり存在します。子どもさんたちの様子や教室の中を興味深く観察しながら、時には授業

内容に関心を持ち聞き入ってしまふ：楽しいひとときです。また、音楽会や運動会、文化祭などの大きな発表の場にも参列させていただいています。何度も何度も調整を重ねながら練習し、作りあげた作品の発表の場は緊張感に包まれています。一人一人の子どもさんたちの顔からは自信が見え隠れして頼もしい限りです。体育館やホールに響く歌声、校庭で多くの歓声を巻き起こす競技や発表。練習の成果を本番に出すというレベルではなく、本番だからこそできる表現に、言葉にならないくらい感動します。

それと似た感動は卒業式でもありました。子どもたちが、保護者にするお辞儀です。一連の動作のひとつコマですが、子どもさんたちはとてもきれいに深く頭を下げます。そこには言葉は何もないのに、感謝の気持ちが伝わって来るのです。心のこもったお辞儀には、こみ上げてくるものがありました。恐らく自身そんなお辞儀をしたことはなかったと思います。

私の任期も一年を切りました。教育委員として残された時間はわずかですが、子どもさんたちを見守るおばちゃんの一人として、学校を含めたいろいろな発表の場に足を運びたいと思います。本番だからこそできる表現の素晴らしさを感じに。



# 生涯学習

No.536

## かおり高い 文化のまち

発行 下諏訪町教育委員会  
編集 生涯学習  
編集委員会

〒393-8501  
長野県諏訪郡下諏訪町4611-40  
(下諏訪総合文化センター内)  
☎0266-27-1111(内線718)  
FAX 0266-28-0131  
E-mail=syougai@town.  
shimosuwa.lg.jp

## P T A 活動と地域の繋がり



下諏訪北小学校 P T A 会長

大槻 三男

昨年の冬に下諏訪北小学校 P T A 会長を引き受けることになりましたが、恥ずかしながら今まで、学校のことは妻に任せてばかりで、年に2〜3回しか学校に行かない、P T A のこともよくわかっていない自分のところに・・・色々と悩みながらも、周りの方々の力強いお言葉をいただき引き受ける覚悟を決めました。

慌ただしく P T A 活動がスタートする中、活動基本方針を「子どもは地域の宝！学校・家庭・地域で連携する「チーム北小 P T A 」としました。北小は、2020年に開校五十周年

を迎えますが、昔も今もそしてこれからも、地域との繋がり（つなぎ）はなくてはならないものだと考えたいからです。

9月開催の「ふれあい講座」、10月開催の「北小バザー」など、地域の方々のご協力をいただいた事業の内ここでは、2020年の五十周年に向けて10月に開催した北小バザー&フリーマーケットについて触れさせていただきます。北小バザーでは、地域の方々のご協力のもと、畑で野菜を作って提供していただきました。収穫は子どもたちが行い、貴重な経験をさせてもらい、北小を思う地域の方々の気持ち



地域の方を講師に、ふれあい講座

が伝わってきました。当日は、子どもたちも張り切って「いらっしやいませ〜」と大きな声で呼びかけていました。私は、このバザーで、地域の方々、保護者が学校に来て、P T A 役員や先生方、そして子どもたちとふれあうことができたことに大変意味があったのではと感じています。

地域で子どもを育てる〴〵そんな話を何年前前に聞いたことを思い出しましたが、当時はまだその状況に置かれていなかったせいか、よくわからずに聞いていたことを覚えています。今、

P T A 活動を通じその意味が少しずつ分かってきたような気がしています。今年も、平成から新年号に変わりますが、地域の方々も子どもたちを思う気持ちは変わりません。私も、できる限り、学校行事や地域の行事に参加し、地域の宝である子どもたちとふれあい、一緒に成長していけることを目標に掲げたいと思います。



いただいた野菜を販売。北小バザー

## ❖ 成人を迎えての決意 ❖

### 二十歳



東町中 吉田 賢汰けんた

光陰矢のごとし——これまでの人生は飛び立つ矢の如く一瞬で過ぎ去ってしまったことを痛感する。

めでたく成人となった。今まで計り知れないくらい大きな愛で自分を育ててくれた自慢の家族、ともに高め合いバカしてくれた友だち、僕の殻を破ってくれた先生、大好きな自然と町並みであふれている下諏訪町。そんな恵まれた環境の中で人生を送れたことに心から感謝する。

現在、僕は山梨県で理学療法士になるため勉強をしている。理学療法士は身体機能を回復させる仕事であり、自分の技術次第で治療を受ける人の人生を良くも悪くもしてしまふ。もちろん僕は人生を良い方向に変えていく理学療法士になりたい。そのためにはまず時間と頭の使い方を上手にしていかなければならない。

僕は時間と頭の使い方が昔から下手である。その結果、数え切れないほど後悔がある。「あの時もっと早くから行動していれば」「あの時もっと違う考え方をしていれば」など思い出したらきりがなくない。しかし僕は一つ確信している。あの時の自分ではないということだ。さらに成長するために今の自分に足りないものを明確にし、時間と頭を無駄なく使い立派な理学療法士になりたい。

これまでの人生が一瞬だったように、これからの人生も一瞬だと思ふ。だから自分の人生が終わるとき、その一瞬の景色にもやががかっていけるのではなく、鮮明に覚えているように精一杯歩んでいきたい。

### 温もりの中で育つということ



鷹野町 松下 奈未なみ

今年、私は二十歳の節目を迎え、大人の仲間入りをしました。現在私は大学に進学し、親元をはなれ勉強はもちろんのこと、アルバイトや課外活動などに積極的に取り組み、充実した日々を送っています。その中で、大学という大きなコミュニティの中での人間関係や、今まで知らなかった社会のルールに頭を悩ませることも多くあります。しかし、今まで挫けることなく、なんとか日々を過ごして行くことができました。

いま、私がこのように充実した日々を送ることができ、社会の中で暮らしていくことができるのは、家族や生まれ育った町、私に影響を与えてくださった方々のおかげであると強く感じます。人に優しくすることを教えてくれた愛のある家族、一緒に悩み、一緒に笑ってくれた友達、自分のことのように心配してくださった先生方、そして18年間見守り続けてくれた下諏訪町。その全てのおかげで私は、迷いながらも自分が正しいと思える選択をし、「自分の道」を少しずつ見つけられつつあります。

そのことに気づけたいま、今度は私がいままで与えられてきたものを、他のだれかに与える番であると感じます。人の温かさは人を育てるということ、周りの人は必ず私を応援してくれるということ。そのことを胸に、社会の一員として自分の足で立ち、同時に人のことも支え、応援できるよう精進していきます。

## 二十歳を迎えて



西四王 小松 太雅 たいたが

今年、私たちの学年が成人を迎えるにあたり時の流れの早さに驚きを感じています。まだ成人したという実感はあまりありませんが、大学生になり多くのことを経験する機会が増え、責任ある行動の重要性を感じています。

生活面では、下諏訪町を離れ、初めての一人暮らしをしています。授業、家事、部活動、アルバイトを両立することの難しさを感じながら過ごしています。実家を離れてから、下諏訪町の魅力を実感することも多くあります。360度山に囲まれ自然が多く、澄んだ空気や夜の星空など。生まれ育った場所を離れることで、初めて良い環境で育ったことを実感するとともに、支えてくれた家族や先生、野球を通じて出会った仲間など多くの人への感謝の気持ちで溢れています。

さて、私は今、大学で建築やデザインなど幅広く学んでいます。小中学校から好きだった、ものづくりの完成した時の喜びや達成感という経験から、この道を選びました。大学ではより深く、なぜそのような形なのか、建築においてもユニバーサルデザインや空間分析など、もう一つ上のレベルで毎日追求しています。

学んだことを生かし、将来は「ものづくり」から「まちづくり」まで、幅広く関わり地域に貢献していきたいと思っています。その上で壁にぶつかることも多くあるかと思いますが、挑戦することを忘れず日々精進していきたいと思っています。

## 前進



社東町 渡邊 亜海 わたなべ あみ

今年二〇歳という人生の節目を迎え、晴れて成人となった。現在は大学進学を機に生まれ育った諏訪の地を離れ、一人暮らしをしている。高校生の頃は都会での生活に憧れを抱いていたが、いざ地元を離れてみると、都会の便利さを享受する一方で慌ただしい毎日に疲れや寂しさを感じることもあり、諏訪の地を恋しく思うことが多々ある。四季ごとに実家から届く野菜を食べた時や帰省時に慣れ親しんだ諏訪の自然を目にしたときは自分の育った環境の素晴らしさを感じ、誇らしく思う。

私は成人を迎えるにあたり、感謝の気持ちを忘れず、常に前進し続ける人間でありたいと思う。ある小説家は、人の本質は二十五歳までの経験と思考が決定すると述べている。人生において最も多感な今の時期、既に仕事をしている人もいれば大学で学び続けている人もいる。各々が経験する内容は十人十色であるが、その中で何を学び、思考するかが大切だと、この言葉は伝えているのだと私は思う。一方、私が今様々なことを学び、経験できているのは家族や友人に支えてもらっているからである。

一人暮らしを始めてから常に私を応援してくれる家族や辛い時に助けてくれる友人のありがたさを身にしみて感じるようになった。これからも感謝の気持ちを忘れず、このかけがえのない今に対し、貪欲に学び続け、立派な大人になれるよう邁進していきたい。

## アメリカと日本の クリスマスとお正月



下諏訪南小学校E.L.T

エイミー・タグチ

皆さんにとって一番大切な行事はなんですか？

私が日本に来て感じたことがあります。それは、多くの日本人はお正月を一番大切にお祝いすることです。家族や友人と大晦日から集まり、豪華な食事を食べ「大切な時間」を過ごし、一年の始まりをお祝いします。多くのアメリカ人はお正月ではなく、クリスマスを盛大にお祝いします。キリスト教でなくても、クリスマスを祝いする人がたくさんいます。他にはハヌカや冬至をお祝いする家族もいます。



日本とアメリカ合衆国

作り、または店で買える飾りなどをを使って、デコレーションを家族でします。

日本のお正月には年賀状を家族や友達に贈るのが習慣的なことです。アメリカでは年賀状のかわりに、クリスマスカードを家族や友達に送るのが多いです。サンタさんに手紙を書く子がたくさんいて、例えば、「サンタさんへ 私はすごくいい子でした。弟にやさしかったです。だからこのおもちゃをください」「これから宿題をがんばりますので、このゲームをくれますらもつといい子になっていきます」など絵をそえて書き、欲しいプレゼントがもらえるようにサンタさんに訴えます。このような手紙がたくさん郵便局に届いて、毎年新聞に一番面白いリクエストや絵などがのつています。

アメリカのクリスマスの料理は、だいたい大きなハムやターキー、マッシュポテト、野菜を食べることが多いです。デザー

トはリンゴパイやフルーツケーキを見かけるのが多いです。日本のお正月のおせちみたいに関係と一緒に食べます。

お正月というと、日本では近くにある有名な神社やお寺に初詣に行き、おみくじやお守りを買うのが多い姿ですが、アメリカではお正月はしません。そのかわり、お正月の前の夜のニューイヤーズイブに自分の家や他のいろんな場所で、12時深夜のカウントダウンを待っている間に友達や家族とパーティーするのが多いです。12時深夜になったら、決まったところで花火があります。

家族によって冬休みの祝いの仕方が似たり、違ったりします。小さいころ、私はアメリカでクリスマスと日本のお正月の両方を経験して楽しんでいました。みなさんもいつかアメリカのクリスマスを生で経験するのをおすすめします。



# ★秋宮リンク「氷上祭」のお知らせ★

日 時：平成31年1月27日（日）

午前9：00～正午

場 所：秋宮スケートリンク（悪天候の場合は中止）

そり引きゲーム、氷上ボウリング、障害物競走など楽しい企画が盛りだくさん！

大好評の下駄スケート体験も実施します😊

参加費無料、事前申し込み不要です。当日、秋宮スケートリンクにお越し下さい。

※駐車場の用意はございませんのでご了承ください。。

問い合わせ先 下諏訪体育館（27-1455） 秋宮スケートリンク（28-7555）



☆そり引きゲーム☆



☆氷上ボウリング☆



☆下駄スケート体験☆



ここ下諏訪にきて三十年以上がたちました。長野県は広く、それぞれの地域の風土が異なるように育んできた文化も異なります。

私が生まれ育った奥信濃と呼ばれる地域と諏訪では本当に様々なことが違います。正月の習わしも随分違います。年取りの魚もこちらは鰯いわしですが、北信では鮭です。また、年末には男の子のいる家では正月飾りと一緒に床の間に菅原道真公の肖像画（かけ軸）を「天神様」といつて飾ります。学問の神様菅原道真公にあやかり、男の子が賢く健康に育って欲しいということ願って母方の実家から贈られます。

この習わしもどこでもやっているものだとばかり思っていました。そうでないことをこちらで暮らすようになってはじめて知り驚きました。調べてみると、正月に天神様を飾るとい風習は、福井県、富山県、長野県の一部等に限られることのようにです。わが家は子どもは女の子だけなので、しばらくは、天神様も飾らずにいましたが、何だかどことなく寂しいものがあり、私の天神様を飾るようにしました。床の間の天神様を見てみると、幼いころの思い出、母方の祖父に心配をかけたことなどがなつかしく思い出されます。

（杉山 清）



1 F 6 2 2